



■入所者百歳のお祝い



■国立療養所多磨全生園「納涼祭」風景



■診察室にて入所者と親身に話す松谷氏

松谷有希雄氏は小児科医であるが、厚生技官として旧厚生省、厚生労働省等において重要なポストを歴任した後、医政局長として、日本の医療政策の推進役を務めた。当時、日本では医療崩壊が叫ばれ、医療費の抑制、医師不足、医療不信、地域格差、後期高齢者の医療など、大きな問題が山積していた。そのような中で、医療の質の確保と安全性の向上のための新たな施策や、情報提供の推進と法制化、また卒後臨床研修の必修化など重要な課題に取り組み、課題の解決に大きく貢献した。

しかし、松谷氏の功績にはもう一つ重要なポイントがある。それは、前世紀の約90年間、強制的な隔離政策により基本的人権を奪われ、差別と偏見の中、療養所で一生を送らねばならなかったハンセン病にかかった人に早くから目を向け、医政局長退任後は自ら進んで国立療養所多磨全生園の園長となり、入所者のケアに取り組んでいる点である。松谷氏は園長就任以来療養環境の整備に邁進し、2008年にはハンセン病療養所としては初めて、日本医療機能評価機構より、問題点の改善に努め成果を上げているとして認定を受けた。入所者の平均年齢は80歳を超え、元の病気との合併症、後遺症に加え、加齢に伴う生活習慣病、うつや認知症等へ対応するため、リハビリ科や精神科の医師を増員。加えて、近隣病院との連携を強化し、診療にあたり、予防にも努めている。職員の組織的な努力もあり、入所者の寿命は平均以上となった。また園を積極的に開放し、季節の行事では近隣の子どもを含む多くの地域の人々が訪れるようになり、入所者の地域との交流が進んできている。

1996年、らい予防法が廃止され、また2001年、熊本地方裁判所においてハンセン病の強制隔離に違憲判決が出されたことにより、現在ではハンセン病にかかった人及び元患者の権利は回復されつつある。しかし、今後多様な病気を抱えた入所者や高齢になった入所者のケアをどう進めるべきか、新たな課題も存在している。ハンセン病にかかった人の療養環境に二石を投じた松谷氏の取り組みは、変化をもたらす大きな二歩であり、ハンセン病にかかった人のこれからのケアの重要な指針として語り継がれるべきものである。



まつ たに ゆ き お

松谷 有希雄 Yukio Matsutani

国立療養所 多磨全生園 園長  
President, Tamazensho Hospital  
(National Sanatorium for Hansen's Disease)

1949年東京都出身。1975年北海道大学医学部卒業後、聖路加国際病院小児科で研修。1980年米国ペンシルベニア州ピッツバーグ大学公衆衛生学大学院でマスターを取得。1981年厚生省入省後は母子保健課・老人保健課、厚生労働省では保険局医療課長等を歴任。2005年厚生労働省医政局長を務める。2007年より国立療養所多磨全生園園長。

推薦者 鴨下 重彦 国立国際医療センター 名誉総長

## ハンセン病と向き合い、療養環境改善に真摯に取り組む